

た」と大概は御了解になつたと思ひますから此手品の種は、申し上げる必要がないかも知れませんが、念の爲めに、一應説明して置きます。

つまり、これは、問ふ人と問はれる人との間に以前から、チャーインと内約があつて、だん／＼問ふて行く中に、こちらで決めて置いたものを知らせる工夫にしてあるので、ホワイト、ゲーム（白遊び）といふのは、そこから取つた名です。即ち、そこいらに在るものを、片端から問ふが、皆いーえと答へる。そして、今度何か白いものを聞いたら最後、其次に問ふものが、即ち決めたものだといふことを二人で前から決めて置いて在るものです。だから、他の知らない人に問はれては、とても答へる譯には行かぬのであります。

いって見ると、詰らないですが、まあ二人で一つや

って御覽なさい、きつと、他の人は吃驚しますから。まあ、之丈にして置きます。

### お多福會

林 天然

ある年のお正月、どこかで福々しい大勢のお多福さんが、お芽出度も親睦會を催しました。時は一月の第一日であつて、寒いにも寒いにも肌を裂くといふ、極々寒い時節であつたけれども、宇宙万象皆新まるといふ時ですから皆んなニコ／＼顔、愉快の外には何にも無い、怒もなければ智慧もない、嫉妬もなければ心配もない、誰一人ブツツラするものはありません、で當日は午前十時から皆タブ／＼と出掛けました、来るお多福も来るお多福も、も一皮一ぱいに肥えて居る、何んでも

恵比須様が大黒様の血統でありましたよ。何れも醬油樽にたがといふみえである、樽に大樽小樽あり、ふ多福の中には身の丈の六尺にも達せんとしてゐる大お多福があれば中には亦はんの三尺許りで圓々としてゐる豆お多福がある、小さい二王様の所へ、お嫁にいつたら、さぞ似合ひましたよ。其他槌子の様なもの、芝茸の様なもの、色々なお多福が參つた、やがて宴會が開かれて大野お福さんといふ方が、開會の主意を述べます、そして、寒い時ですから、甘酒を熱くわかして、コップへ注いだ、酷く熱いもんですから、何れも頬をブクリンと膨らかし、フウ〜と吹きながら飲んだ、二杯飲ひ、三杯飲ひ、宴會も酣となりました。

「アタイが注ぎましたよ」

「アラマア何うも恐れ入ります。すす少し下さい」

「オットト溢れ出しますよ」ホホホホ……………」

「おてんさん何か一つお話しなさいましな」

「アレかですさんが、もう彼所で歌ひ出しました」

「サアおてんさん諸はなけりや踊りなさい」

おてんさんはトウト浮かされて、手巾をひろげてしなやかに舞ひ始めた

「ハアお龜の初年頭……………」「ヤ〜」お多福共は餘程酔つて来た、それでなくとも平常キヤ〜笑つてるものが、酔つちや、堪りません「オッホッホー」「エッヘー」「エヘヘー」「アッハッハー」と、お饅頭の様に頬邊を横にひろげ尻を下げ、腹を抱かへて轉ろげ倒れるもの、兩手で兩方の頬をおさへ、落さない様にして笑ふもの、櫛ぐられて、もーお腹の中から笑聲を出し切つて、ハアハアと呻る

ものなどありまして、夫は〜大騒ぎ、

『イイワネー、笑ふ門には福来る』

『ヤヤマア洗ふ川には河豚来たる』

『悪い後には福来たる』其内に豆お多福が横鉢巻

きでズツト兩肌をぬき、水杓子を振り廻はし、ド

ツコイ〜と、躍り出た。短い足をチヨイ〜と

踏張る風が、マア何とも言ふ様がない、まるで繪

にかいてあるボンチ晝！けれども御常人は一生懸

命、顔を眞赤にして「ヤレコリヤセッセノセー」。そ

ちでもちでも面白がり、頬邊たいて賞め囃ま

した、すると突然に戶外で一種變つた聲「ヒヤ〜」

と叫んだ、近に居たお多福が、何者かと思ひ、窓

から窺いて見たら、生酔ひな達摩様であつた『ヤ

ア達摩さんが来た、面白い達摩さんだ』といふ聲

聞さ、満座のお多福共が一時に立ち上り、一ツか

らかつてやれと、吾も〜と戶外に出ると達摩は

これはと思ひ、逃げ出さうとした所が、はやワア

〜と取圍まれ、逃道が無い、仕方がないから目

をバチ〜して居ると、お多福共が二重三重に寄

集ひて見て居る。

『達摩さん面白い話がありますかね』

『有るとも〜』

『何處へ行つたの』

『大黒さんの所へ、年始に行つたのだ』

『御馳走はあつたの』

『あつたとも〜、海のものでは鯛、鮪、板魚、

章魚、牡蠣、陸のものでは鴨、雉、牛、葱、芹、

蓮根！お前さん達が行ったら、それこそ、頬邊落し

て歸るんだつたかも知れぬ。我輩は肴は充分だつ

たが酒が足りない、まだ五舂や六舂は飲める』

『では達磨さん此所にお酒が有るかと思つて來たんでせう』

『そーですわ〜』

『馬鹿いへ、年とつても達磨様だ、ソラ極りはいゝものだ、天下飲むべき時には五舛六舛は愚か、一斗でも二斗でも飲むんだ。天下飲むべからざる時には、チャント口をしめ、一年も二年も大人しく力氣味んで居るのだ、お前さん等の宴會つて、甘酒に汗粉、乍憚夫んな客なものなんぞ一生飲み、及び喰はんだ、唯餘り賑やかだから、チョイと窺いて見たのだ。所がハヤれ話にならんじやないか、あれでは婦人社界の風紀を亂すといふもんだ。いやはや呆れ果て、思はず囃出したのだ、少とたしなむがい〜』

こゝに端なくも鬪論會が開かれた、紀多福方の一

人薄口おしやさん腕まくりをしながら『勿論達磨さん、天下踊るべき時には、イセオンドでも何でも踊るべしだ。天下踊るべからざる時には、一年でも二年でも、チャント口をすぼめて澄まして居るのですわ、而して、達磨さん、貴公さつき鯛や鮪の美味を誇りました、斯様な動物性食物をさごしめして、佛法の本旨に違はんですか』善い哉言、紀多福諸嬢、此叔父さんを誰だと思ふ、此叔父ちゃんはの!! 日本唐天竺三子に至るまでも、もてはやさるゝ達磨大將様だ、そんな事は御心配に及ばんよ』

すると『エー此ん親父め!!』と唐突に達磨をねんめした者があつた、達磨は不意討を喰つて、コロと倒れた、がテクリと起上つた、すると又横から『達磨大將寝ても起る!!』とねんのめした、又

テクリと起上つた、面白がつて、大勢のお多福共が、彼所からも此所からも『達磨大將ねても起る!! 達磨大將ねても起る!!』とコロ／＼轉がし廻はしました。何んば達磨でもかうなつちや、氣が氣じやない、コロ／＼コロ／＼、も一熱くなつた、目が眩む様になつた、到底も堪らんから、マ、ヨ大暴れに暴れ散らしてやらんと、今度は自分からコロ／＼と轉がり、ぶつかり次第にお多福共をぶつたをしてやつた根が温和いお多福共ですから、ア、怖い／＼と寝たり起きたり大騒ぎ、がら／＼と室内へ逃込んだ。達磨も先きから意地目られ、逃場を失つて、困り居るのであつたから、これは幸ひと、クリ／＼と轉がりながら、自分の家へ還つてしまひました。

(まだあります)

## 音 樂 會

そ の 子

(一) 美しいちゃんのお家

東京の山の手、小石川の或町の裏長屋に今年十二になる、美しいちゃんといふ女の子が、去年の暮に、お父つあんを亡して、今年の暮にはまた、お母さんが病氣で寝んで居るといふ不仕合はせ、もうお正月が三日か四日したら來るといつて他の子供等は美しい衣物を買つてもらつたり、其上に羽根だの毬だのといつて、大騒ぎをして居るのに、今日も美しいちゃんは朝から晩まで、お母さんの枕元に座つて、始終お母さんの脊中を撫で、は、時々口の中で何か低い聲で唱つて居るのであります、臺所には、御飯もありません、そして可愛相に、美しいちゃんは、朝からまだ何も食べないので